観賞温室第2室 企画展示

●4月6日(水)～5月15日(日)
「にいがたの花　シャクナゲ・ツツジ展」
●5月18日(水)～7月10日(日)「ハーブ展」
第1部「ハーブを楽しむ」5月18日(水)～6月12日(日)
第2部「香る植物」　6月14日(火)～7月10日(日)

観賞温室第3室 1階展示

●3月29日(火)～4月17日(日)
「にいがた花絵プロジェクトの活動と
今年のデザイン画大賞　紹介」
出展：にいがた花絵プロジェクト
●4月19日(火)～5月8日(日)
「伝統とそして今を楽しむ栃尾てまり」
出展：栃尾てまりの会
●5月10日(火)～5月22日(日)
「ボタニカルアート展」出展：下越ボタニカルアートの会
●5月24日(火)～6月12日(日)
「花の写真展」出展：秋葉写真クラブ
●6月14日(火)～7月3日(日)
「押し花の仲間達」出展：森のアトリエ
●7月5日(火)～7月24日(日)
「植物色図鑑　色サンプル展4」出展：植物色図鑑

特別展示

●3月15日(火)～5月8日(日)
「はなみどり写真コンテスト入賞作品展」
出展：(公財)新潟県都市緑花センター
注)会場：観賞温室第3室無料休憩コーナー(入館無料エリア)
●4月8日(金)～4月10日(日)
「春の大つばき展」
出展：新潟県花つばき協会／注)会場：花と緑の情報センター

イベント　春の植物園まつり

5月4日(水・祝)、5日(木・祝)《観賞温室入館無料》
・バックヤードツアー　・クイズラリー　・植物などを使った体験教室
・園芸相談　・物販(植物・食品)など

イベント　にいつ花ふるフェスタ

6月5日(日)10:00～16:00
《観賞温室入館料100円 ※中学生以下無料》
・ミニガーデンコンテスト　・盆栽家山田香織さんの園芸教室
・音楽ステージイベント　・ミニSL試乗、飲食物販　など
主催：にいつ花ふるフェスタ実行委員会

花と緑の教室 ※要申込(開催日の1カ月前から電話受付)

※会場(または集合場所)「花と緑の情報センター2階 研修室」

●4月10日(日)10:00～12:00
「ツバキの管理」剪定などの実技をまじえた教室です
定員：20名／参加費：300円／講師：石井たき(新潟県花つばき協会)
●4月13日(水)13:30～15:00
「植物園花散歩①　サクラと春の花」
定員：15名／参加費：300円／講師：田中良明(当園職員)
●5月1日(日)13:30～15:00
「植物園花散歩②　シャクナゲ」
定員：15名／参加費：500円／講師：倉重祐二(当園副園長)
●5月8日(日)13:30～15:00
「植物学講座①」
定員：30名／参加費：300円／講師：未定
●5月11日(水)10:00～11:30
「植物園花散歩③　ボタン」
※5月8日の趣味の園芸にシャクヤクとボタンについて倉重が講師で出演します
定員：15名／参加費：300円／講師：倉重祐二(当園副園長)
●5月22日(日)13:30～15:30
「お散歩カメラ」カメラを持って気軽に植物園散歩
定員：10名／参加費：1000円／講師：パソコンサプリ 小林由美
●5月29日(日)10:00～11:30
ガーデンツアー「国営越後丘陵公園でバラ観賞」
定員：15名／参加費：300円／講師：倉重祐二(当園副園長)
(越後丘陵公園の駐車場料金、入園料は別途お支払いください)
●6月8日(水)13:30～15:00
「植物園花散歩④　ハーブ・宿根草」
定員：15名／参加費：300円／講師：久原泰雅(当園職員)
●6月12日(日)10:00～11:30
食文化講座①「違いのわかるコーヒー教室」
産地による味の違いや、フードペアリングについて、楽しみながら学びます
定員：15名／参加費：1,000円(温室入館料込)／講師：小林みどり(カフェゲオルク)
●6月12日(日)10:00～11:30
ハーブ教室① フレッシュハーブを使って「香りのハーブアレンジメント」
(フレッシュハーブティー付き) 定員：15名／参加費：1500円
講師：難波真寿美(上級ハーブインストラクター・花穂Herb&Spice School)
●6月12日(日)13:30～15:00
「植物学講座②」
定員：30名／参加費：300円／講師：未定
●6月19日(日)10:00～11:30
「マツの剪定①」
定員：10名／参加費：300円／講師：田中良明(当園職員)
●6月22日(水)10:00～11:30
「マツの剪定②」
定員：10名／参加費：300円／講師：田中良明(当園職員)
●6月26日(日)10:00～11:30
ハーブ教室②「ハーブの観賞と利用」
定員：15名／参加費：500円／講師：林寛子(当園職員)

●観賞温室利用案内
開　館／9:30～16:30(入館締切16:00)
入館料／大人600円、シルバー(65歳以上)500円、高校生・学生300円(要学生証提示)、小中学生100円
※土日祝日は小中学生の入館料無料

●観賞温室開館カレンダー(休館日)

4 April						
日	月	火	水	木	金	土
・	・	・	・	・	1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

5 May						
日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31	・	・	・	・

6 June						
日	月	火	水	木	金	土
・	・	・	1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	・	・

●交通アクセス　※駐車場無料(350台収容)
高速道路／磐越自動車道新津ICから国道403号三条・加茂方面へ約15分
一般道路／(新潟方面から)国道49号茅野山ICから国道403号経由約20分
ＪＲ／信越線古津駅から徒歩約25分
バス／区バス:新津駅東口から「新津駅西口」行き「美術館・植物園前」下車徒歩約1分
新潟交通バス:新津駅東口から「矢代田経由白根・潟東営業所」行き
「新津美術館入口」下車徒歩約10分

新潟県立植物園
〒956-0845　新潟市秋葉区金津186番地
TEL.0250-24-6465　FAX.0250-24-6410
Eメール botanical@greenery-niigata.or.jp
ホームページ http://botanical.greenery-niigata.or.jp/
指定管理者　国際総合学園・都市緑花センターグループ

VEGETABLE OIL INK
植物油インキで印刷しています

NIIGATA Prefectural Botanical Garden
NEWSLETTER

新潟県立植物園

植物園だより

冨樫信平画 S61.5.7　荒川町産

ミツガシワ

Menyanthes trifoliata

〈ミツガシワ科〉

葉の様姿がカシワに似ているところからこの名が付けられた。

冷たい水辺や水苔のある湿地、山地の浅い泥地などに生える多年草。

地下茎は太く水底を長く横にはり、節から細い根を土中にのばす。葉は長い柄があり小葉は柄がなく3枚をまとめて付ける。長さ4～8cm巾2～5cmの楕円形で、質は厚く全縁で鋸歯状に波打つ。

花は4～8月頃に高さ20～40cm葉よりも高く直立した花茎の先に総状に10～20花を咲かせる。花は長さ1～2cmの小花柄の先に斜上向きに開き、萼は5深裂して緑色、花冠は5裂して白色まれに淡紅、花弁の内面には白毛が密生する。

多数の花が一度に咲いていると、たいへん目立ち美しい。

解説：冨樫信平(抜粋)

Volume 63
2016 spring

貴婦人

越の炎

紫宝

舞娘(まいこ)

昨年の展示の様子　新潟県内で作出されたシャクナゲも展示

観賞温室 第2室 企画展示

にいがたの花 シャクナゲ・ツツジ展

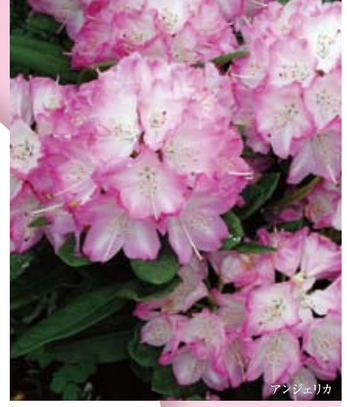
樹高3mを超える 大株のシャクナゲを特別展示!

平成28年
4|6(水)－5|15(日)

シャクナゲとツツジは、どちらもツツジ科ツツジ属の植物です。北半球を中心に1,000種以上があり、花の美しい種の園芸化が進んでいます。

新潟県は全国一のシャクナゲ生産量を誇り、新品種も数多く作出されています。当園では開園当初からシャクナゲのコレクションを進めており、日本最大級のシャクナゲ園も計画中です。

今回の展示では、樹高3m以上のシャクナゲの巨木を中心に、華やかな西洋シャクナゲ、ツツジの園芸品種を多用した庭園を創出。白花の代表品種‘フィリス・コーン’、明るい真紅の大輪花‘ジーン・マリード・モンタギュー’、咲きはじめは紅色でしだいにクリーム色に変化するヤクシマシャクナゲの交配種である‘パーシー・ワイズマン’、新潟県生まれの‘アンジェリカ’、‘越の炎’、‘貴婦人’、‘舞娘’などの園芸品種を紹介するほか、当園が世界に誇るコレクションから貴重な野生種を公開します。普段は見ることができない大株のシャクナゲやツツジの花を、一足早く温室内の花園でお楽しみください。


アンジェリカ

かぐや姫

観賞温室 第2室 企画展示

ハーブ展

第1部「ハーブを楽しむ」 平成28年 5|18(水)－6|12(日)
第2部「香る植物」 6|14(火)－7|10(日)

3回目となった人気のハーブ展、今回はハーブが最も美しく観賞できる初夏に開催します。

ハーブは、人間が利用できる多くの機能、作用をもつため、香料、食用、薬用など、古くからなくてはならない植物として利用されてきました。

第1部では、ハーブが実際にどのように利用されているのかに注目し、料理への利用や、香りを楽しむためのクラフトなどを紹介します。第2部では、「香りをもつハーブ」を中心に、実物のほか、ポプリや精油とともに、香りの作用を紹介します。

メイン会場は、見ごろを迎えるハーブ、当園のアジサイコレクションで初夏の庭を創出し、ハーブをつかったガーデニングの提案を行います。

ぜひ初夏のさわやかなハーブの空間を、見て、触れて、香りを嗅いで、存分にお楽しみください。

過去の展示のようす

エキナケア

ラベンダー

イベント情報

植物園まつりの様子

5月4日と5日は観賞温室は無料で入館できます

春の植物園まつり

植物園の日(5月4、5日)は 温室入館料が無料

公益社団法人日本植物園協会では、5月4日の「みどりの日」を「植物園の日」と位置づけ、「ふるさとの植物を守ろう」をスローガンに、全国の植物園でさまざまな展示やイベントが行われています。

当園でも、花や緑に親しんでいただくとともに、植物園の活動を広く知っていただく機会として、5月4日(水・祝)、5日(木・祝)に「春の植物園まつり」を開催いたします。植物園の裏側が見られるバックヤードツアーや、植物などを使った体験教室、クイズラリー、園芸相談、植物販売などイベントが盛りだくさんです。あわせてこの2日間は観賞温室の入館が無料となりますので、多種多様な植物が見られる熱帯植物ドーム、企画展示「シャクナゲ・ツツジ展」を多くのお客様にご覧いただきたいと思っております。皆様のお越しをお待ちしております。

花ふるフェスタ会場の様子

ミニガーデンコンテスト作品展示の様子

第15回にいつ花ふるフェスタ

平成28年6月5日(日)

今年で第15回となる、にいつ花ふるフェスタ(主催:にいつ花ふるフェスタ実行委員会)が6月5日(日)に開催されます。

昨年に引き続きNHK教育テレビ「趣味の園芸」の元キャスターで盆栽家の山田香織さんの園芸教室が開催されるほか、地元団体の方々による歌やダンス、演奏のステージイベント、ミニSL試乗体験、飲食の出店などで賑わいます。

当日は観賞温室入館料が100円で、中学生以下は無料です。温室内ではハーブ展も開催されていますので、ご来園のおりには観賞温室にもお立ち寄りください。

第8回ミニガーデンコンテスト 出展作品募集!

花ふるフェスタの当日に会場に彩りを添えるミニガーデンコンテストの作品を募集します。ミニガーデン部門と寄せ植え部門の2部門で最優秀賞、優秀賞、特別賞を決定します。4月中旬からコンテストの申込み受付を開始いたします。

ミニガーデン部門の大きさはタテ1m×ヨコ1m程度、寄せ植え部門の大きさは8号鉢(24cm)以上15号鉢(45cm)以下です。詳細は4月中旬に配布する募集要項でご確認ください。皆様のご応募をお待ちしております。

平成27年度寄せ植え部門優秀作品

平成27年度ミニガーデン部門最優秀作品

にいつ花ふるフェスタやミニガーデンコンテストについてのお問い合わせ等は、「新津観光協会」(電話 0250-24-3777)まで。
ホームページ http://www.niitsu.or.jp/~n-kankou
または 新津観光協会 検索

NEWS 1
新しい指定管理期間に向けて

日頃より、多くの県民の皆様から、県立植物園をご利用頂きまして誠に有難うございます。厚くお礼申し上げます。

お陰様で、県民の皆様方から温かく支えられながら、3月末日で、第2期指定管理期間の5年間の満了を迎えます。本当に長い間お世話になりました。感謝申し上げます。

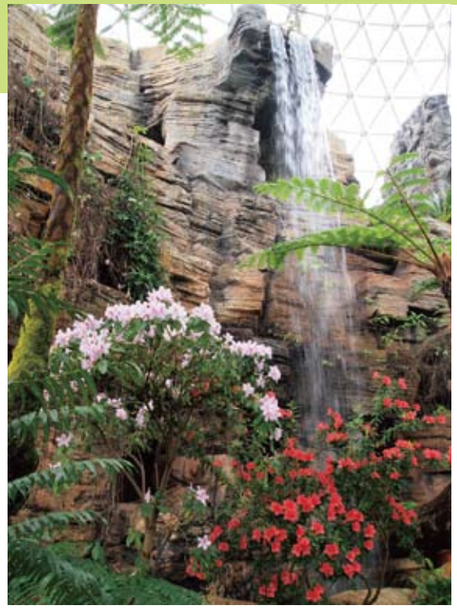
さて、新たに、平成28年4月から平成33年3月までの5年間、第3期指定管理期間が始まります。先般、新たな指定管理の公募の結果が県から発表になり、引き続き私ども、「国際総合学園・都市緑花センターグループ」が県立植物園の管理運営にあたることとなりました。

現在、新しい指定管理期間の事業と体制の構築に向けて、職員一同、気持ちを引き締めて取り組んでおります。是非、期待してお待ちいただきたいと思います。

これからも、県民の皆様に愛され、皆様のニーズに対応し、充実した『新潟県立植物園』になるよう管理運営に務めますので、今後ともよろしくお願いします。

平成28年3月15日

新潟県立植物園長　山森和敏
(指定管理者：国際学園・都市緑花センターグループ)


熱帯植物ドームに植栽したセイシカ(*Rhododendron latoucheae*)とケラマツツジ(*R. scabrum*)

NEWS 2
植物園の新たな試み

4月から新しい5年間の指定管理期間がはじまります。その間、平成30年には植物園は開園20周年を迎えます。

植物園では、これまで新潟の花き生産を代表するツツジ、アザレアやシャクナゲなどツツジ属の植物、シャクヤクを台木とする繁殖技術を生み出したボタン、新潟の自生植物など、新潟県の野生植物や園芸植物を守るために、収集や植栽を進めてきました。

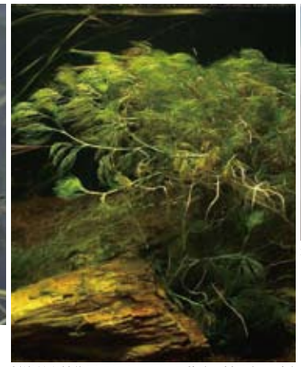
今後の取り組みとして、日本一の規模のシャクナゲ園の整備、園路沿いのサクラ並木、これまで収集した200品種以上のユキツバキの育成と植栽、観賞と保全を目的とした絶滅危惧植物を含む新潟の野生植物の植栽、子供向けの教育の充実や新規植栽等を進めていく予定です。もちろん企画展示や温室内の植栽も充実していきますので、さらに魅力的になる今後の植物園にご期待ください。

(倉重祐二)

企画展で当園のコレクションを紹介(アザレア展)

園内の植栽　シャクナゲ、ボタン、サクラをさらに充実

バイカモの花


新潟県立植物園におけるバイカモ栽培の様子(2005年)

筑波実験植物園で展示されたバイカモ水槽(2013年)

NEWS 3
バイカモの栽培に挑戦
(*Ranunculus nipponicus var. submersus*)

当園は、(公社)日本植物園協会が行う植物多様性保全事業が定める植物多様性保全拠点園として、植物の生息域外保全活動を実施しています。生息域外保全とは、対象の生物を生息する場所ではなく別の栽培環境で人工的に育てることで保全することです。植物にはまだ人工的な栽培が成功していないものが数多くあり、今回栽培に挑戦するバイカモも、そのような植物の一つです。

バイカモはキンポウゲ科の水草で、湧水などの清流に見られます。主に6～7月に直径1～1.5㎝程のウメに似た花を水面に咲かせることから名付けられ、清流に生育する植物としてのイメージが高いため、滋賀県米原市の醒井宿(さめがいしゅく)などでは生育地が観光名所になっています。新潟県では各所で見られますが、それでも清流を含む湿地環境は最も環境破壊が進む場所であるため減少傾向にあり、絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。

当園では、平成19年から20年にかけてバイカモの栽培を行い、冬から夏頃にかけての栽培は行えたものの、通年での栽培には成功していません。また、国立科学博物館 筑波実験植物園では平成25年に行われた「水草展2013」でバイカモの展示を行い、それ以降に試行錯誤することでほぼ栽培可能になってきているようですが、栽培に必要な条件の確立を含め、課題が残されています。

バイカモを含む栽培困難な水草への対応については、植物多様性保全拠点園の一部のメンバーが中心となり構成している「水草保全ネットワーク」によって様々な情報を入手し対応を進めていますが、それらの技術の確立には多大な設備やエネルギーを必要とします。

一方、国立大学法人長岡技術科学大学では、新潟県と連携し、西川浄化センターにおいて「下水熱・バイオガスを利用した植物生産技術の開発」を進めており、当園も植物の栽培について協力を行っています。現在まだ計画段階ですが、この施設を一部利用してバイカモ栽培を行う話を進めています。下水道施設は全国に存在するため、それらの施設とエネルギーを有効活用して現在課題となっている希少植物の栽培を行う技術が開発できればと考えています。

(久原泰雅)

全国初のチューリップの商業栽培に成功した新潟市の小田氏

展示状況

NEWS 4
新津駅東西自由通路を花で飾る

新潟市秋葉区産業振興課からの依頼により、今年の1月から3月にかけて、新津駅東西自由通路にて植物の展示を行っています。

新潟市秋葉区は古くから全国有数の花き生産地であり、アザレアやボケ、シャクナゲなどの花木類は全国一の生産を誇ります。これらの生産は主に秋葉区の小合地区で行われてきましたが、それはこの地区が信濃川でも頻繁に河川が氾濫する地域にあり、米作に適さなかったことから栽培が始まったと言われています。

河川の氾濫は作物を押し流しましたが、一方で山の豊かな土も運びます。このことが花き生産を成功させたかどうかは不明ですが、関東を含む太平洋側とは異なる気候(冬雪が多く、春晴天が多い)なども含め、この地区で様々な多くの植物が栽培され、全国的な評判を呼びました。

しかし、それらは生産者のあくなき努力があってこそのものであり、ボタンをシャクヤクに接ぐ技術の開発や、アザレアやシャクナゲを全国に先駆けて導入し日本人に馴染みやすいよう和名をつけて販売したこと、全国で初めてチューリップの商業栽培を成功させたこと、ボケの接木を冬の仕事として確立したこと、クリスマスローズを海外からいち早く導入し日本人の好みに合った育種を行ってきたことなど様々な挑戦がありました。

自由通路には、アザレア(1月)やクリスマスローズ(2月)、ボケ(3月)を中心に展示するだけでなく、上記のような秋葉区の園芸文化史についてもパネルで紹介しています。新津駅にお立ち寄りの際は是非ご覧ください。

(久原泰雅)

園内ウォッチング〈温室〉

●たわわに実るジャボチカバ

（*Plinia cauliflora*）フトモモ科

ブトウの‘巨峰’に似た果実が幹に直接実る姿がおもしろいジャボチカバ。実りはじめは緑色で、熟すと濃紫色へと変わります。味や食感はブドウに似ており、原産地のブラジルではポピュラーなフルーツですが、やわらかく傷みやすいため日本では店頭に並ぶことはほとんどありません。

実がなる前にはもちろん花が咲きます。幹をよく見てみると年明けからあちこちに膨らみが・・・。しばらくすると、やがて蕾となり花が咲きます。幹に直接花が咲き、実が着くものを幹生花もしくは幹生果（どちらも読みは「かんせいか」）といいます。

多数の雄しべが特徴の1cmほどの可愛らしい真っ白な花を咲かせます。ポツポツと咲き始めたなと思っていると次々に蕾が出て、びっしりと幹を覆います。花は2～4日で終わってしまいますが、春のほんの一時、幹を覆い尽くすほど満開になります。熱帯植物ドームの滝の近くの熱帯果樹コーナーに大きな鉢植えを展示していますので、ご来園の際にはお見逃しなく。

（鈴木尚子）

1 幹から直接 蕾が出る

2 普段は目立たないが、わずかな期間満開となる

多数の雄しべが特徴の花
わずか数日でしおれてしまう

3 緑色の実が大きくなると徐々に赤紫色に変化する

4 濃紫色に熟した果実はブドウのような味

園内ウォッチング〈園地〉

サクラの開花が気になる季節になりました。植物園のソメイヨシノは、県立鳥屋野潟公園内にある標準木よりも二日ほど遅れて4月10日前後に咲きますが、この植物園だよりがお手元に届くころには、すでに早生のサクラで咲き始めている品種もあると思います。

園内ではこれまでカンヒザクラが最も早く咲いていましたが、一昨年にこれより早咲きの二季咲性の‘ジュウガツザクラ’、‘コブクザクラ’、‘シキザクラ’など15本を植え、昨年には五泉市の村松公園で大正時代に発見された‘ホザキヒガンヤエザクラ’、‘アーコレード’、‘カワヅザクラ’など12本を植栽しました。

2メートルほどの苗木が多いため本格的な花を楽しむには十年ほど待たなくてはなりませんが、その頃には、ソメイヨシノが咲き始める前からサクラの花を楽しむことができるでしょう。昨年、植栽した5メートルほどの‘ジュウガツザクラ’1本と‘カワヅザクラ’3本の花は今でも充分に楽しんでいただけると思います。3月にはハーブ園側の園路わきに‘カワヅザクラ’の苗木を44本列植しましたので、だんだんと充実するサクラ並木を楽しみにしてください。

（田中良

コブクザクラ　*Prunus* ‘Kobuku-zakura’

シキザクラ　*Prunus* x *subhirtella* ‘Semperflorens’

カワヅザクラ　*Prunus* ‘Kawazu-zakura’

※写真の和名および学名は、大原隆明「サクラ ハンドブック」（2009、文一総合出版）に拠った。

新潟の植物

マツグミ

マツグミ（*Taxillus kaempferi*）は、針葉樹に半寄生するヤドリギ科の常緑低木です。

花は赤い筒状（1.5cmほどの長さ）で夏に咲き、マツの緑の中でよく目立ちます。マツグミの名は、マツの樹上に多く見られ、果実がグミに似ていることに由来します。種子は果実を食べた鳥によってはこぼれ、果実のまわりには幹にくっついて発芽するのに都合がいいように粘着質の層があります。

関東・富山県以西の本州、四国、九州に分布しますが、新潟県内でも数か所に見られます。これらはマツのなかまに寄生しており、マツクイムシ（マツノザイセンチュウ）の被害によるマツの減少、伐採にともなって消滅の恐れがあるとして、新潟県第２次レッドリスト（2014年）に絶滅危惧Ⅱ類として選定されました。果実は人間が食べてもおいしいようですが、食べる機会はなさそうです。また、マツグミがついたマツはマツノザイセンチュウによる松枯れが起きないという噂?がありますが定かではありません。

（林寛子）

アカマツについたマツグミ

花

2月の果実。春に赤く熟す

NHK新潟ラジオセンター「朝の随想」セレクション

一目３億円のチューリップ畑

（2015年2月23日放送）

県立植物園の温室では、「にいがたの花チューリップ展」を3月に開催します。

チューリップの花は、温度にもよりますが、だいたい10日くらいで散ってきてしまいます。そのため、温度を調整して、毎週順々に開花させるようにしています。

みなさんもご存知のように、新潟県はチューリップ球根の商業生産の発祥の地です。これは大正9年に、新潟市秋葉区の小田喜平太がはじめたものです。その後、富山県などに生産が広まったので、チューリップの本家本元は新潟県です。現在は切り花の生産量は全国一、球根の生産は富山県に次いで全国2番です。

さて、チューリップを見ても、現在はなんとも思われないと思いますが、明治20年代に輸入されはじめた当時は、珍しいのはもちろん、とても栽培が難しい植物だと思われていました。これは、東京などの太平洋側の気候がチューリップの栽培に適していなかったためですが、当時はどうしてうまく栽培できないのかが分かりませんでした。

チューリップはもともと涼しい高原に自生している植物で、葉が出ている時期に涼しい気候が必要です。関東は5月には30度を超える日もありますが、新潟は比較的涼しく、春の晴天率は関東よりも高いんですね。そのため、葉のついている期間が長くて、球根に十分に養分を蓄えることができます。

それともう一つ、球根を植えつける秋の気候があります。夏前に掘り上げた球根は、外見は変わらないのですが、中では、来年に咲く花芽ができはじめます。花芽は寒さに当たらないと、うまく咲きませんので、秋に植えて十分に寒さに当てます。ですので、寒さが十分でない沖縄では、普通に栽培してもチューリップは咲きません。

秋に植えつけられた球根は、土の中に隠れて見えませんが、しばらくすると根が伸びてきます。関東ではちょうどこの時期から、雨が少なくなり、根から水分を吸収することができません。一方、新潟では天気が悪く雨も多くなって、水分が十分あって、根も良好に伸びてきます。

これが、昔チューリップの栽培が難しいと言われた理由です。ふやすことが難しいので、毎年球根は輸入されていました。当時は舶来の西洋の植物は非常に高価でしたし、チューリップのように国内で生産されないものは、さらに高値でした。大正時代のチューリップの球根の値段を今の価格に換算すると、2000～3000円となります。昔の写真を見ると、1～2球を鉢に大事に植えて、育てられていたのが分かります。

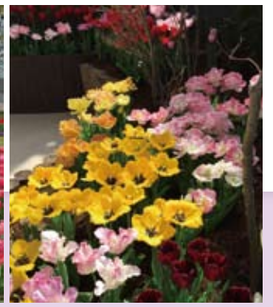
毎年のように五泉市のチューリップ畑を見に行きますが、HPを見ると、15万本が植えられていると書かれています。これを大正時代の値段の1球2000円だとすると、3億円となります。新潟市秋葉区の生産地では、大正から昭和初期には大勢の見学者が訪れたといいますが、こんなに高価だと、当時の人が見に行きたがったのもうなずけます。

（倉重祐二）

太田政弘知事を迎えた小田氏のチューリップ畑。
チューリップ球根の商業生産が開始された初期、
大正８年から12年の間に撮影

五泉市のチューリップ畑

植物園でも春にはチューリップが満開となる


外に先がけて3月に温室内で開催される
チューリップ展ではさまざまな品種を展示